仮面と運命と剪定者

カオス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神の間違いで死んでしまった主人公はとあるエロゲーの主人公として転生をする。

しかしそこは殺伐とした世界だった。

そんなこんなで始まる原作沿いになるべくしたい主人公が歩む物語である。

１話では原作を知らない人のために世界観の説明があります。

目次

世界観と特典説明と0歳〜3歳 ― 1
4歳〜12歳 ― 12
13歳〜15歳 ― 25
戦争〜ドラゴン ― 33
竜族〜彼女 ― 45
メイド〜戦争 ― 55

世界観と特典説明と0歳～3歳

俺は転生した。特典などはランダムでこれから決められるが…まぁ早い話、転生した。よくある間違って殺しちゃったからお詫びに転生させてあげまーすっていうやつだ。しかもエロゲーの世界で転生だ。と喜んでいたが転生先はTiny Dungeon（タイニィ ダンジョン）というエロゲーの世界だ。しかも憑依転生って奴だ。強制的に主人公をやれっていう神の悪戯なのだろう（確信）

※最初は説明だけです。

とりあえずTiny Dungeon（タイニィ ダンジョン）について説明しよう。知っている人はとばそう！

面白おかしく省略（要約）して説明するので詳細を知りたいならWikiで!!

Tiny Dungeon（タイニィ ダンジョン）とはまぁ言ってしまえば剣と魔法の世界って言う奴だ。魔物もいるし魔法も使える。剣…武器もあるし種族も四つある。

王道の異世界ならここで魔物を退治しながらヒロインたちと愛を深めていくという物語なのだがこの物語は全然違う。まず異世界ですぐに思いつく種族と言えば人間、ドワーフ、エルフ…挙げていくときりがないがこのあたりだろう。

しかしこの世界では人族、神族、竜族、魔族と四つの種族に分かれている。神族や魔族、竜族は思い浮かべるのが天使だったり悪魔だったり竜の鱗がある巨体の種族だったりするがこの世界はあくまで人の姿を取っている。天使でもなければ羽もない。悪魔でもなければ凶悪な姿でもない。鱗がある巨体でもない。全て人間と同じ姿をとっている。（まぁ少し違う部分もあるが…）

人族…人界で住んでいる種族。魔法も特別な能力もない。しかし他の種族とは違い凄い知恵を働かせる種族だ。そして儀式兵器と呼ばれる物を作り人族でも魔法を使える様にするという知恵を働かせた種族だ。儀式兵器は持ち主しか使えない兵器だ。勿論人族という名前だが人間だ。

魔族…魔界に住んでいる種族。無駄にプライドが高い種族だ。魔力を扱える量が他の種族よりも多い。何故か（ここ大事）天使みたいな羽を持っている。羽は増幅器で簡単に言えば羽が多ければ魔力を扱える量が増えるというわけだ。けど魔族の羽では飛べない。攻撃魔法が得意。補助と回復魔法は苦手。

神族…神界に住んでいる種族。仲間意識が高い種族だ。銀髪であるほど扱える魔力が凄いという種族だ。まぁ一部または半分が銀髪とか完全に金髪の神族が普通。防御や回復、補助魔法が得意。言ってしまえば器用貧乏。攻撃魔法は苦手。神はいない!!!

竜族…竜界に住んでいる種族。自由であることを尊ぶ種族だ。魔力は殆どないが身体能力がとても凄い。岩や地面を砕くほど。出産時は女しか生まれない種族でもある。しかも人族と相性がよく出産する確立が高い。（多種族だと低い）夫となった男は竜族としての力を持つ。他の種族と比べると十倍近い寿命を持つ。気鱗という闘気を使える。あと獣耳がついている！

そんな四種族だが勿論力の強弱がある。

魔族〉竜族〉神族〉魔族である

簡単に言うと竜族は魔法攻撃に弱くて魔族はその魔法攻撃がとても強いので竜族にとっては相性の悪い相手になる。しかし竜族は圧倒的な物理の攻撃で神族の防御魔法などを壊すため神族との相性はいい。また神族はその防御魔法などで魔族の攻撃魔法を防御が出来るとなっている。

まぁこの三種族はポ〇モンでいう御三家（最初にもらえるポケ〇ン）みたいなものだ。しかし人族は魔力を制御し、魔法を扱う能力は神族に近いことから俺は空気読めない種

族だと思った（偏見です）

世界観はその四種族で戦争をしていた。その原因が人族という。これは戦争が終わって四種族が一つの学校を作り上げた。その学校に主人公が行くという話

主人公『白鷺（しらさぎ）　姫（ひめ）』は人族で魔法無しで圧倒的な力（魔法を使う）を人たちと戦う。勇者に憧れる青年。そんな人間に転生した。

ここからは原作を知らない人も見たほうがいいですよっと一応忠告しておく。

結果から言うと俺は転生特典をもらってない。もっと正確に言えば誕生日と共に貰える。大事な事なのでもう一度言う…誕生日と共に貰える！つまり生まれたその日に特典を貰って1歳になったらまた貰える。２歳になったらまた貰えると結構凄い量の特典を貰える！

…が世の中そんなに甘くはない。設定したカテゴリの中でランダムで貰える。ちなみに神がアニメや漫画、ゲームなどの世界から一つとドラマの世界から一つのカテゴリを選ばなければならなかった。俺はＦａｔｅのカテゴリと平成からの仮面ライダーのカテゴリを選んだ。交互に貰える０歳に仮面ライダー、１歳でＦａｔｅと交互に貰える。何がもらえるかはランダムなので分からない。簡単に言えばガチャだな！特典がもらえるときは天からお告げが来るように頭の中で響くそうだ。

と説明はここまで。ここからは王の話を…じゃなくて現状の話をしよう。今の状況は…

俺「おぎゃーおぎゃーおぎゃー」（何で俺森の中で捨てられているの!?）

森の中にいた。出産したときの記憶はない。しかも生まれているのに特典もない。目が発達してせいかあまり緑と茶色しか見えない。…最悪だ。

女性「こっちから赤ちゃんの声が…あらこんな所に赤ちゃんが!?」

女性の声が聞こえ多分女性が近寄ってきた。正直肌色とその他諸々の色が混ざっている物体にしか見えない。冷静に判断していたらいつの間にか抱え込まれていた。

俺は何とかして赤ちゃんの喜ぶ声の真似をして住ませて貰おうと努力する。

女性「可愛い…捨てられていたのかしら？このまま放置するのは可哀想だし私の息子ってことにすれば問題ないね！」

俺「きゃっきゃ♪」

女性「そうね名前は…苗字は私と同じ白鷺で…姫！姫にしましょう！」

それは知っていた。

女性「そして今日が誕生日って言う事にしましょう！」

え…それって今日が俺の生まれた日って事!?つまり…

天のお告げ［特典、仮面ライダーの中から一つランダムで選びます］

来たーーーーー!!!!

天のお告げ［万丈龍我の丈夫な体を特典として送ります］

…えっ？それだけ？確かに頑丈だけどだってほら仮面ライダーなら変身道具とか地球の本棚とか…

天のお告げ［あなたに神のご加護があらん事を］

……マジかよ!!!!

転生特典を貰い衝撃な真実を受けて結構消沈している。まさかだけどビルドならハザードレベルが足りないから変身ができないとかエグゼイドなら適合者にならないと変身ができないとかあるわけないよな…メッチャ怖い

特に何の出来事がなかったので０歳から２歳までの出来事はあんまりないからパッと言わせて貰う。俺を拾って１ヵ月後、母が結婚した。そして二歳のとき女の子を産んだ。その女の子は原作でもでてきた主人公の妹…皇女だ。そして父と母そして皇女の四人で暮らしている。２歳児の俺は外は危ないからという理由で外に出してもらえない。まぁ当然だな。だから友達と呼べる人もいなければ何か出来事もなかった。

ちなみに特典は１歳で直死の魔眼…空の境界じゃんと思ったらよくよく考えてみたらＦａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　Ｏｒｄｅｒで登場しているので納得したと同時にまた一つの恐怖が増えた。プリズマ　イリヤ…これの本当の名前はＦａｔｅ／ｋａｌｅｉｄｌｉｎｅｒ　プリズマ　イリヤ。…何これ？俺ルビーとか貰っても変身しないよ!!魔法少女ならぬ魔法少年？あんなフリフリしたもの絶対着ない！想像しただけでも吐き気がした。

二歳は地球の本棚だ。この世界が地球かどうかは知らないがこの世界のすべてを閲覧できるので正直結構ありがたい。暇なときは地球の本棚の中に入って適当に時間を

潰す事もできるし世界の情報収集もできる。けど使い道に少し困る。今日の戦争と調べても千を越える本があり更に絞っても百を超える本がある。限界まで絞った結果一つの本棚まで絞れたけどそれでも数が多い。一つ読んでいるうちに結構時間が経つ。やはり的確なキーワードが必要なようだ。

そして今俺は三歳になった。

神のお告げ［特典、Ｆａｔｅの中から一つランダムで選びます。…エミヤの魔術の事に関する全てを特典として送ります］

姫「よし!!」

俺は思わずガッツポーズを取った。部屋に一人なので母親には見られていないが大きな声を出せば駆けつけてくるので「よし」だけで留めて置く。

神のお告げ［同調を開始します］

姫「えっ?…ギッ!!!」

次の瞬間のも凄い激痛に襲われた。今までこんな事はなかった。体中が痛い!!このままだと叫んでしまう恐れがあったので近くにあった布団を加えて無理やり声を抑えた。

痛い痛

い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛
い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛
い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛
い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛
い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛
い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛
い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛
い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛
い痛い痛い痛い！！！！

あらゆる情報が頭の中に流れ込んでくる。体中に何かが張り巡らされるように電撃が走る。

神のお告げ［同調終了。あなたに神のご加護があらん事を］

同調（？）が終了し痛みから解放される。そして俺は目の前が真っ暗になった。

目を覚めて周囲を見渡す。空を見る限りさほど時間は経っていないようだ。俺は特典の事は後で置いておくとして先に同調の事を考えていた。

姫「いままで…こんなことはなかった………なぜエミヤの魔術を得ただけでこんなに

……得た？エミヤの魔術、それは無限の剣製（アンリミテッドブレイドワークス）。そこには千を超えるまさに無限のような数の剣や槍が投影された物がある。それの作り方、そして魔術回路。…なるほどつまり今までの物は一瞬で得ることができる物だったがエミヤの魔術は得る物が多すぎて時間が掛かり短時間で得るために死なない程度に得ようとした結果、体中が悲鳴を上げたってことか」

俺は確証はないがそうだと判断しお楽しみの投影に移った。

姫「投影・・・開始!」

魔術回路が開き両腕から魔術回路の光が光る。俺は二振りの剣を作る。白と黒の剣。干将（かんしょう）・莫耶（ばくや）だ。

姫「重っ！」

俺はあまりの重さに地面に落としてしまってあわてて干将・莫耶を消した。っというか持ってすらいなかった。そしてすぐに悟った。3歳児が大人が持つような剣を持てるわけがない。当たり前だけど盲点だった。

姫「今度は俺と同じサイズにして…投影開始!」

さっきとはちがいとっても小さい干将・莫耶が二振り出てくる。包丁ぐらいの大きさかな？

姫「よし！今度はちゃんとできた！」

俺は軽く干将・莫耶を振るうが違和感がある。そしてまたすぐに悟った全然振れていなかった事に。そう今の俺はまるでというか本当にはじめて剣を持ったような感じの振り方でキレのある振りではなかったことに。

姫「…まさかエミヤの魔術だけってこと!?」

天のお告げはこういっていた『エミヤの魔術の事に関する全てを特典として送ります』っと。つまり魔術に関しては全て得たが剣術や心眼（偽）などの動きや技術は貰ってないと…

姫「世の中って本ッッッ当に甘くないな！」

俺は（母に聞こえないくらいの）大声で叫んだ。

４歳～１２歳

四歳になりまた特典を貰える時間を待つ。

天のお告げ［特典、仮面ライダーの中から一つランダムで選びます］

四回目となる今でもこの選ばれる前の緊張感がある。まるでガチャでいいのがあたるかもしれないっという奴に似ている。勿論エフェクトなどはないので勝手に緊張しているだけだが…

天のお告げ［仮面ライダーディケイドとしての能力を特典として送ります］

目の前に白いドライバー…ディケイドライバーとライドブッカーが現れる。空中に浮かんでいる二つの物を手に取ると浮遊していたなぞの力が消えた。

天のお告げ［あなたに神のご加護があらん事を］

意外と早くドライバーが手に入ったことに少し戸惑いを隠せなかったが改めてドライバーを見て喜んだ。

姫「よしっ！…さてライドブッカーの中身は……」

まずスラッシュ、イリュージョン、ブラスト、インビジブル、バリヤー、クロックアップ、ギガント、サイドバッシャー、ストライクベント、アドベント、オートバジン…ア

タックライドのカードは一部なかったがそれでも使えるカードが結構あったので思わずガッツポーズ。そして仮面ライドの方のカードは……ない!!!おかしい!ディケイドにもなれないって…その代わりといって何にも書かれていないカードが何枚か入っている。

姫「じゃあアタックライドも出来ないのか!?」

俺はディケイドライバーを腰に当てベルトが勝手に腰に締まる。ちょっとした感動を覚えながら比較的何も起こらないインビジブルのカードをベルトに差し込んだ。

アタックライド『インビジブル』

鏡を見て俺が本当に消えたのでホッと安心をしてベルトを外しこう思った。

姫「あたりを引いたと思ったのにやっぱり何かしらのオチがあるな…」

おれはそう結論付けた。

5歳になりやっと外に出る許可を貰った。俺は今更ながら思った…俺の両親は過保護すぎるだろっと。外に出て町中を歩き回ったがこれ町じゃなくて小さな村だった。少し衝撃の事実だった。少し森の方に行き試せなかったアタックライドのカードを入れる。

結果は全て原作どおりだった。
言い忘れていたが特典はＦａｔｅの騎士（ナイト）は徒手（オープン）にて死（オーナー）せず
これはどんな物でも武器に変えられる宝具だがもうエミヤの投影能力を持っているのでさほど必要性は感じなかったがあって損はない物なので素直に喜んだ。

そして年月はすぎて俺はついに１２歳となった。ちなみに特典は…
６歳…檀黎斗のガシャットの創作能力（バグスターがいないし電脳ゲームも存在しないので意味がない）
７歳…心眼（偽）第六感が働くようになった
８歳…ＳＭＡＲＴ　ＢＲＡＩＮ　ｈｉｇｈ　ｓｃｈｏｏｌの制服（過去最大に要らない特典）
９歳…魔力放出（氷）攻撃に氷の属性を付加することが出来るようになった。
１０歳…花家大我並の命中精度　普通に使える
１１歳…鷹の目　簡単に言えば視力がよくなった

両親には勇者になりたいといって修業の許可を貰った。かなり渋っていたが何とか認めてもらった。１２歳になり儀式兵器を貰いに行った。

１２歳になった。特典は仮面ライダー龍騎に出てくるカードすべて。

カードバイザーが無いのでつけないと思ったがディケイドで使えた。なんでも神がそうしてくれたらしい。神様…あんためっちゃ神様みたいだよ（半錯乱状態）

そしてついに原作物語の片鱗を見せる

儀式兵器を受け取る所にはたくさんの人がいた。殆ど俺と同じ年くらいの人ばっかりだ。人数は２０人くらい。建物の中に入り席に座り待機している。確かここでヒロインの一人が出てくるんだったよな……あれ……名前は思い出せるヴェル……容姿はどんなのだっけ?どんな性格だっけ?……１２年前になるともう記憶が前世の記

憶が忘れてきているのか！しかもあのゲームをやったのは死ぬ前の２年位前だったはずそう考えると１４年も経っている。忘れていてもおかしくはない…

突然大きな音を立てて壁が崩される。その衝撃波で俺は吹っ飛ばされる。その衝撃で軽く意識が跳んだ。

目が覚めたときには地獄絵図だった。俺以外の全員が殺されていた。

黒髪の少女「人族は…邪魔…いらない…」

そうだ！思い出したあの子がヴェル…ヴェル＝セイン。背丈以上の漆黒の大鎌そして黒い服に黒の髪…まさに死神を連想させる姿だ。まったく改めて対峙すると凄い威圧感だ。特典がなければ失神していてもおかしくはない。俺は体を動かそうとしたがあまり動かなかった。チッ…当たり所が悪かったのか足に力が入らない……

ヴェル「…まだ生き残りがいたの？」

黒髪の少女…ヴェルはこっちに近づいてくる。やばい下手に動こうとして音を立てたのが運のつきか。

ヴェル「…ふぅん……逃げないんだ」

違うんです。動けないんです。確かこの後に裏切りがあったはずだけど…あったっけ……？本当に怖くなってきた。

姫「お前…名前は？」
ヴェル「名前？…そんなものを知ってどうするの？」
姫「どうでもいいだろ？」
そう…このやり取りは全部時間稼ぎだ。裏切りがなければ衛生兵を待つための時間稼ぎ。裏切りがあればなおよし。
ヴェル「そう。まぁ別にどうでもいいわ。どうせ死んじゃうんだもん。教えてあげる。ヴェル＝セインよ」
稼げた時間…およそ１０秒……絶望的な数字だな。俺は密かに魔力回路を開く。衛生兵の救援は絶望的に無理だろう。ならば魔力回路を体中に通して魔力で無理やり動かす。俺が考えたのはそれくらいだった。
ヴェル「さぁこれでいいわよね。死んじゃいなさい、人族」
ヴェルは手に持っている大鎌を高く振り上げた。
姫「投影（トレース）…」
ヒュッ!!
ヴェル「きゃあああっ!!」
次の瞬間、悲鳴と共にヴェルは沈んでいた。ドクドクと赤い血が溢れ出ている。
ヴェル「どういう、こと…」

翼がなくなっていた。八枚あった漆黒の翼が右半分が完全になくなっていた。視線を別の方に向けると複数の魔族が気色悪い笑みを浮かべながらヴェルを見下していた。

魔族Ａ「別になんてことはねぇ…予定通りだよ」ニタァ

今の俺は自分でも驚くほど冷静になっていた。助かった事による安心感。別の魔族が複数いたことによる恐怖感。それら諸々すべてをまったく感じないくらいに冷静になっていた。裏切るっていうのは不確かだったが原作で知っていたのでそのこと事態に驚きはない。俺が感じていたのは死という概念。俺は死んだが他者が寿命死以外で死んだ姿を見たことがない。溢れ出る血そして死に掛けているヴェル…それらを見て俺は改めて思い知った。この世界は…とても残酷なのだと。原作では筆写されていなかったが現実でこれを見ると前世の俺なら間違いなく吐いている。それなのに俺は冷静だった。いや正確には色んな感情が混ざり合い冷静になっているだけだった。

魔族Ｂ「アンタ強すぎたんだよ。ヴェル様。その年でトリア様と同じ八枚羽？それはねぇぜ」

魔族が色々話をしている要約するとこの裏切り魔族のトップは魔王の血族。つまり魔族のトップの血縁者ってことだ。そのトップが魔王になりたがっている。しかし

ヴェルが強すぎるため次世代の魔王になれない。ならば人族を襲ってそして裏切り人族が殺しました。っていうことにすればヴェルがいなくなったことにより次世代の魔王になれる確率が上がるという事だ。そして人族を襲っていた理由は一言で言うと騙されていたから。魔族のトップが人族を襲えと言うホラを吹き込みそれを実行した。しかし公認ではないためヴェルが勝手に人族を襲い殺したっていう事になる。つまり事情を知らない奴らは自業自得と考えるだろう。

ヴェル「きゃああん」

男はヴェルを蹴飛ばす。俺の方へと飛んできた。ヴェルはまだ少し遠くにある大鎌に手を伸ばす。

ヴェル「ゆる……さない……母様(かあさま)に…手を……出さ、せない……」

ヴェルは泣き顔だった。ただ悔しそうに涙を流していた。それでも戦おうと大鎌に手を伸ばす。はっきり言ってこの先の展開はヴェルの死だけだろう。だから俺は…

ヴェル「え…」

魔族A「そこの人族！何をしている!?」

姫「何をしているだって?見て分からないか?」

ヴェルの背中に手を当てて俺の原作と同じ事をする。しかし俺は白鷺姫ではない。殺されかけた魔族に想いを込める事などできない。あくまで俺はシラサギヒメ…憑依

した唯の贋作。ならば贋作には贋作のやりようがある！

姫「儀式兵器をこいつにくれてやっているんだ！」

そう俺はこいつに儀式兵器の全権限をくれてやる儀式兵器の形状、能力、儀式兵器の使用許可まで全ての権限をだ。別に俺は儀式兵器がなくても戦っていける。俺はあくまで儀式兵器は補助装置ぐらい物だと考えていた。だから簡単に捨てられた。

姫「ヴェル＝セイン！お前に最高のチャンスをくれてやる！」

ヴェル「え…？」

姫「お前が今一番必要としているものを言ってみろ！」

ヴェル「なんであんたなんかに…」

姫「いいから答えろ!!」

ヴェル「っ！魔族の翼」

魔族Ａ「そんなことさせるか!!」

姫「次、能力！……投影開始（トレース・オン）・憑依経験、共感終了。工程完了（ロールアウト）。《全投影バレット》、待機クリア」

俺の周りに大量の剣が出現する。

魔族Ｂ「なっなんだ！それは!?」

ヴェル「っ!?…魔族の翼としての機能！」

ヴェルも突然出現した剣に驚いたが俺の問いに答える。

姫「ならその姿を明確に思い浮かべろ！…停止解凍（フリーズアウト）、全投影連続層写（ソードバレルフルオープン）!!」

俺は大量の剣を魔族たちに向けて一斉発射する。

魔族C「…っ!?全員、防御魔法！」

ドドドドドドドン!!!

大量の剣が魔族たちに降り注ぐが防御魔法で防いでいく。あれただの剣。どこの町でも売っているような唯の剣だ。当然、魔族たちが防御魔法が得意ではなくても飛んできた唯の剣を防御する事は可能だ。そうあくまで俺は時間稼ぎと目くらまし。

その間に全てが終了する…

煙が晴れ魔族たちは驚愕していた。俺ではなく俺の後ろにいる存在にだ。白と黒の八枚羽。色は違えども紛れもなくヴェル＝セインの復活である。

全身に魔力を張り巡らせて俺はあるものを取りにいく。ヴェルの大鎌だ。

姫「ヴェル！」

俺はヴェルに大鎌を投げ渡しヴェルはそれを受け取る。

ヴェル「…有難う……人族の人…そしてよくもやってくれたわね…！吹き飛びなさい!!!」

ヴェルは魔力を思いっきり込めて大鎌を振るう。建物が殆ど通り消し飛んだ。さっ

きまでいた魔族たちはいない。多分ヴェルの攻撃で消し飛んだのだろう。その証拠に魔族たちがいたところには血が散乱していた。

ヴェル「……」

姫「……」

お互いに無言が続く。とっても長く、短くも感じた。先に口を開いたのはヴェルのほうだった。

ヴェル「本当に有難う…私の誇りを私の命を助けてくれて」

姫「…別にいい。たかが儀式兵器がなくなっただけだ」

俺は体についた埃などを落としながら本当にどうでもいいアピールをする。というか本当にどうでも良かった。

ヴェル「けど…本当に良かったの？儀式兵器って一人に一つしか作れないって…」

姫「お前を助けたいと思ったから助けた。唯それだけだ」

ヴェル「えっ…」

姫「その儀式兵器はすでにお前のものだ。所有権も使用権もすべてくれてやった。そいつを生かすも殺すもお前の自由だ。」

俺はそういってこの村から出ようとする。

ヴェル「何処に行くの!?」

姫「俺がここにいる用事は既に無くなった。ならさっさと帰るだけだ」
ヴェル「…ねぇまた逢えるかしら？」
姫「さぁな…お前が会おうと思ったら会えるんじゃあねぇの？」
ヴェル「何それ…クスッ……最後にあなたの名前だけ聞かせて？」
姫「…白鷺……白鷺姫だ」
俺はヴェルに背を向け歩き始める。
ヴェル「少し待って！」
姫「何？…っ!?」
俺は振り返ったら唇に軽く感触が感じた。いやこれは…キス…
ヴェル「また逢いましょ！白鷺姫♪」
ヴェルは笑顔で俺にそう告げるとスキップで行ってしまった。
姫「変わりすぎだろう」フッ…
俺は密かに笑ってしまった。

この事件で数多くの人族を失った。そしてこの事件のことを血の事件と呼ばれ魔族、人族に歴史に残るだろう。首謀者は魔王妃トリア＝セインの手によって捕縛されたものの、どのような罪が下されたのかは発表すらされていない。どのような事件であった

かを知っているのはごく少数だ。

１３歳〜１５歳

１３歳のときは宝石魔術をもらった。えっ…宝石が無ければ使えない？投影魔術で…やっぱり無理？宝石いくらすると思っているだ!!……没!!

１４歳にはディケイドのアタックライドのカードが少し…ほんの少し増えた。ブレイドが使っていたマッハとメタルだ。使える！

そして…１５歳になった。Ｆａｔｅｇｏの主人公の性別変更を手に入れた…おかしい!!これ能力なの？能力とカウントしてもいいの？…まぁ気になるから俺は一回だけ使ってみた。…（若干違うが）レムだ！レムになった。分かる人にはこの言葉だけでわかるんだがリゼロのレムだ。分からないならＦａｔｅのマシュを水色の髪にした感じ、または艦これの浜風を水色の髪にした感じでもＯＫ。胸のサイズは…図り方分からないけどＥはある！…訂正レムはそんなに無かったような気がする…あったっけ？マシュはＣかＥぐらいありそうだけど…うんマシュの水色髪バージョンだと思ってくれてＯＫ。

そして今俺は少し遠出をしている。流石に１５歳にもなったらある程度の自由が利く。今俺は森の中を探索中だ。様々な魔物がチラホラいて面白い！（赤スライム、青ス

ライム、緑スライムがいた）

暫く歩いていると遺跡（？）みたいなものがあった。

姫「遺跡？…古代遺跡か？そういえばお母さんがここら辺には古代遺跡があるといっていたな…けど兵器っぽいものも役に立ちそうなものも無いから研究が中断されたらしいが…」

当然面白そうなので入ってみた。入った感じはザ・遺跡って感じでなんか面白くなかった。地球にある遺跡となんかあまり変わらない。変てこな絵があってちゃんと古びたものがたくさんあって…まぁザ・遺跡だな！

確かに素人の目から見ても珍しいものが一切無い。そして多分遺跡の最深部（？）に到達した。ここで始めて少し珍しいものがあった。

…ダイヤルだ。そしてダイヤルには数字が書かれている。それも三桁の。動かすのにちょっと時間が掛かるが…これは間違いなくダイヤルだ。当然この世界にもダイヤルはある。ダイヤル式鍵のマジックアイテムなどがその例だ。俺は適当に動かし『０３２』にした。…当然何も起こらない。壊れているだけなのかそれとも暗証番号が違うだけなのかは定かではないが飽きたので玉座のほうに移動する。玉座の後ろに隠し階段が！…なんて展開も無く玉座があった所にも何にも無かった。

もう一つ気になる所があった。ダイヤルの反対側の壁には手形の窪みがあった。

ぴったりでなはなく少し窪みの方が大きかった。手形の窪みの隣には何かを差し込むような穴があった。まるで剣を突き刺した後のような穴だ。

姫「最初からこうすればよかった…投影開始(トレースオン)！」

俺は窪みと穴を投影魔術で解析をした。…解析の結果、手形の窪みは人物の特定のための機械。そして穴はやはり特殊な剣を突き刺してロックを解除する魔法が組み込まれていた。つまりこの穴は剣を鍵とした鍵穴。ここで少し疑問に思ったことがある。穴のほうは分かるが手形の窪みはあくまで人物を特定するためのものであって特定の人物でないと解除できないとかそんなものではなかった。

姫「まぁどうでもいいけど」

俺は手を窪みの所に置きながらとある武器を作り出す。

姫「投影開始(トレースオン)…破戒すべき全ての符(ルールブレイカー)」

破戒すべき全ての符(ルールブレイカー)…あらゆる魔術を初期化するという能力を持っている。そしてこの世界では魔法も初期化が可能であった。これでロックしてある魔法を初期化するつもりだ。

姫「運よくこれでロックしている魔法を初期化して何か起こらないかな？」

俺は破戒すべき全ての符(ルールブレイカー)を穴にさした。…10秒がたったが何も起こらない。…30秒たったがやはり何も起こらない。1分が経過したが何も起こらなかった。やはり

そんなものだろう。もしかしたらダイヤルの番号もあわせなきゃいけないかもしれない。別に投影魔術があるのでやろうと思ったらダイヤルの番号もすぐにわかる。

姫「…ここまでやったんだダイヤルのほうも投影魔術で解析してこの遺跡に何があるか調べてみるか。…財宝がやっぱりあるのかな?それとも古代兵器?」

俺は破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）を穴に入れたまま手形の窪みから手を離した。すると俺の体が青い光の粒子となって足元から消えていく。例えで言うとＦａｔｅの英霊が霊体化や消えるときに生じる感じのものだった。

姫「な、なんだこれ!?転移魔法?いや…なんだか違う。転移魔法はこんな転移の仕方ではしない。これは一体、何の魔法だ?」

俺は何とかしようとして自身に投影魔術で自身の状態を性格に確認しようとするがどうでもいい情報が頭の中に駆け巡っていく。魔術回路の状態やその他諸々。知りたい情報が咄嗟に出ないことに俺は焦りを感じていた。そしてとうとう俺の体は全ての体が粒子となって消えていった。

目が覚めた時に真っ先に目に飛び込んできたのは青い空と……何処までも続くような草原……そして焼いた後のような草、もくもくと上る黒煙……

姫「いやいやいや…おかしいでしょ!?黒煙?何この戦争みたいな風景!?」
青い空にはもくもくと上がる黒煙が、何処までも続くような草原には所々焼いた後のような場所…もっと言うなら草原に火がついているところもある。そしてよく見てみると赤い液体みたいなものが草に付着している。あれはもしかしなくても…
姫「血…もしかしなくても人間の血だよな、アレ」
戦争はもうとっくに終わっている…なのに大量の血がある。ヴェルのときみたいに誰かがだまされてやったのか?…いやそれにしては規模がでかすぎる。あれではまるで見つけてくださいって言っているようなものだ。そんなことよほどの馬鹿ではない限りしないはず…だとすれば
姫「タイムスリップ?」
タイムスリップ…つまり過去に来たという仮説。何年前に来たとかは分からないが現実味が無い仮説だ。これならまだ馬鹿がやったテロ行為のほうが信じられる。そう結論付けるにはまだ早計だな。それにまだ色んな仮説はあるはずだ。ただの夢でした。なんていうオチも考えられる。
姫「とりあえず情報収集だな。じっとしていても始まらないし」
ということで始まった情報収集。まず人を探そう。こんな殺伐とした所に人がいるとは思えないが……っ!?

姫「熾天覆(ローアイアス)う七つの円環(イアス)!!」

魔力の塊がこっちにきたのでとりあえず熾天覆(ローアイアス)う七つの円環(イアス)を展開する。熾天覆(ローアイアス)う七つの円環(イアス)とは簡単に言うと七つの盾が重なっている魔力で出来た盾だ。元はアイアスが使用した盾がモチーフだ。

魔力の塊…いや魔法だ。しかも相手を殺す威力を持った攻撃魔法。熾天覆(ローアイアス)う七つの円環(イアス)は一枚も敗れず防ぎきったがこれは本格的にまずい状況になった。相手は俺を捕捉しているのに俺は姿も確認できない。とりあえず下手な動きを見せず次に売ってきた瞬間そっちの方向に攻撃を避けながら詰め寄る。それしかおれに出来る選択肢は無かった。

……攻撃されない!?えぇ…まじどうなっているの!?攻撃されたと思ったらそのまま放置?わからない…相手が何を考えているのかまったく理解できない。…一瞬原作のあの人(ネタの塊)を思い出したがすぐに頭を切り替える。……分からない人はいいよ…今はまだわからなくて…そう今はまだ。

とりあえずさっき攻撃された方向に鷹の目を使い遠くのほうを見る。……遠くには人が……殺しあっている。多分あれは魔族と竜族だな。片方は竜族で間違いは無い。獣耳がついているもん。もう片方は多分あの魔力の放出の仕方は魔族であっているだろう。竜族の方が押され気味だ。そもそも竜族は多種族と比べて数が少ない。数で押

されたらひとたまりも無いだろう。…って。

姫「さっきのやつはやっぱり…っ……流れ弾だったか」

俺は魔力弾…本当に唯の魔力の塊、多分威嚇に使った魔力弾だと思うがそれを裏拳の要領で弾き飛ばす。思いのほか遠くに飛びすぎて近くにあった山の谷部分に飛んでいった。ドガンって言う音が聞こえその後ガラガラガラっという音が聞こえる。谷でも崩れて土砂でもできたか?…弁償とかないよな?

山の方向を見ていたら人影…もっと詳しく言うなら誰かが倒れている足が見えた。俺はそいつに駆け寄り声をかける。竜族だった。

姫「おい!大丈夫か?」

竜族A「う…な、なぜここに…人族が?」

姫「そんなことはどうでもいいだろ。今治療してやる」

竜族A「そんなことをしなくてもいい…もう死ぬって言うのは分かっている」

そうこの竜族は大怪我を負っていた。生きていたのは竜族の生命力があってこそだろう。竜族ではなければもうとっくに死んでいてもおかしくないぐらいの大怪我だ。俺が治療しても生き残る確率は1%ぐらいだろう。

姫「すまない…では少し聞きたいことがある」

竜族「なんだ…軍に関係する事以外ならいいぞ」

軍と言う言葉に引っ掛かりを覚えたが気にしないことにした。
姫「ここはどこだ？」
竜族「なんだ…そんなこともしらないのか？ここは竜族の領地の○×□と言う所だ。」
知らない土地の名前だ。というか他種族の領地の名前なんて知らないのは当然か。
姫「じゃあ今何年だ」
一番聞きたかった情報を聞く。
竜族「可笑しな奴だな…今は○年の×月だろ」
俺は酷く驚いた。驚愕といってもいいほどに。そう…その年は…
滅界戦争をしている年……俺はどうやら３２年前の過去に来たようだ。

戦争～ドラゴン

衝撃の真実が発覚した。タイムスリップしたって言うのは仮説だったけどあったがまさか本当に戦争している時代にタイムスリップしたとは今でも信じられない。色んな情報を教えてくれた竜族の人は死んでしまったけど安らかに眠っていった。

姫「少し状況を振り返ろう」

多分…というかもしかしなくてもあの古代遺跡にあった装置がタイムスリップ装置だったのだろう。ダイヤルは何年前にタイムスリップするかの装置。あの手形の窪みはタイムスリップする人を特定する装置、剣の穴は無闇に使われないように鍵をかけるようにしたのだろう。

姫「状況は大体整理できたがまだ色んな不確定要素があるな」

まずいっ、どうやって戻るのか。これが一番の不確定要素。そしてこの時代にいる間、元の時代の時の流れはどうなっているのだろうか?止まっている?それとも普通に流れている?まぁこれは現時点では判断の使用が無い。そして最後にこの時代にいる間どこで衣食住をすませるか。まぁ最後のは簡単だ。食べるものはそこらへんの動物でも狩っていれば普通に食べ物は手に入る。住む所は木の上とか洞窟とかに住めばい

い。後は服だが…これは申し訳ないが戦争で死んでいった人たちが着ていた服を洗って着ればいい。何処かに保護して貰えるのが一番いいことなんだが…

グオオオオオオオオ!!!!

姫「……なんだあれ？」

…本当なんだあれ？いや理解は出来る。しかしアレがこっちに来ているって言う真実を認めたくないだけだ。空を飛び、こっちに向かってきている黒い生物。……ドラゴンだ。

でも何故ドラゴン？ドラゴンは基本的には温厚で攻撃はしない。食事も近くにいる動物などを食べるので人はドラゴンを避けて住む。逆に挑発するような行動や言葉、ドラゴンに攻撃する又はドラゴンに害があることをすれば怒り近くにいる人間全てを滅ぼすだろう。しかもドラゴンはトップクラスで強い魔物。討伐するのに軍を動かす必要があるほどの戦闘能力を持っている。

ぐオオオオオオオオオオオオ!!!!

あれはかなり怒っている。戦争しているときに流れ弾でも受けたか？……わかった。マジでわかった。……結論から言えば俺が悪い。俺が流れ弾を弾き飛ばしたときに山の谷の部分にあたり土砂が起きた。その近くにドラゴンがいたのだろう。…やばい。もしあそこにいる戦場に原作のキャラクターがいたらバタフライ効果で何

らかの影響があるかも知れれない。

姫「原作崩壊だけは避けないと…」

原作が崩壊したら助かる未来がなくなる可能性もあるかもしれない。原作キャラがいなくても何らかの影響があるかもしれない。どちらにしろ助けないと後々困る事になる。俺は一つの剣と弓を投影する。

姫「我が骨子は捻れ狂う…」

そう遠距離攻撃をしてドラゴンを打ち落としなかったことにしてしまえば問題ない。そう俺は判断した。

姫「偽・螺旋剣(カラドボルグII)!!」

偽・螺旋剣(カラドボルグII)…本来、剣だったものをエミヤがアレンジして弓矢にしたものだ。弓矢だけではなく剣としても使えるが今回は遠距離なので弓矢として使った。偽・螺旋剣(カラドボルグII)は空間すら捩じ切るほどの貫通力だ。これならドラゴン二だって通用するはず。しかも射撃能力をプラスする特典＋鷹の目で目がメッチャよくなっているので確実に当たる。

ドガァァァン!!

ドラゴンに命中して大きな爆発が起こる。

グオオオオオオオオオオオオオオ!!!!

姫「マジかよ……」

鱗が何枚か剥がれたが言ってしまえばそれだけだった。完全に甘く見ていた。特典の力ならなんとかなると特典を過信しすぎていた。エミヤが使っていた偽・螺旋剣（カラドボルグII）はあんなものではない。もっと強かったはずだ。

ドラゴンは進路を変えず戦場に飛翔していく。更なる怒りを身に宿しながら。どうやらさっきの攻撃を戦場にいる人たちと勘違いしたようだ。このままでは本格的にやばい。

姫「魔術回路…身体能力強化」

俺は魔術回路を開き身体能力強化魔術を身に宿す。そして一気に走り抜ける。ドラゴンは空中にいるため障害物なしで動くことが出来るが俺は死体やら瓦礫などで一々足止めをくらい、徐々に引き離される。

そしてついにドラゴンが戦場にたどり着いた。

魔族「ド…ドラゴンだーーー!!!」

魔族A「な、なんでこんなところにドラゴンがいるんだよ!?」

魔族B「知らないわよ！っというか早く逃げたほうがよくない!?」

魔族の指揮官「総員撤退!!しんがりは私が務める!!」

魔族C「危険ですトリア様！私たちが…」

竜族「ドラゴン!?なんで???!!!」
竜族A「これって結構やばいよね!?」
竜族B「ウルシア様、バリアリーフ様どうなさいますか!?」
ウルシア（？）「うむ…総員撤退せよ！殿は俺とバリアリーフでする！」
バリアリーフ（？）「殿は私一人で十分です。ウルシア様も撤退を！」
ウルシア（？）「俺は竜族の王だ。兵を一人でも多く生き残させるのが王としての…いや上に立つものとしての役割だ！」
バリアリーフ（？）「…わかりました。では総員撤退！」

両軍は撤退を始めた。しかし…

竜族「攻撃魔法!?なんで！」
竜族側から攻撃魔法がドラゴンに直撃した。
魔族D「あっははははは。竜族のトップと魔族狩りを殺せるならこの命惜しくは無い!!」
竜族A「貴様！魔族か!?」
瞬時に魔族を殺し攻撃魔法をやめさせるがもう遅かった。

グオオオオオオオオオオオオ!!

さっきの攻撃でドラゴンは攻撃対象を竜族に定めた。
バリアリーフ（？）「早く撤退なさい！死にますよ」
バリアリーフ（？）の言葉で竜族の兵は撤退を開始する。そしてドラゴンと対峙するのはバリアリーフ（？）とウルシア（？）だけだった。バリアリーフ（？）は気鱗を纏った鞭で攻撃。ウルシア（？）も気鱗を纏った拳で応戦するもドラゴンの防御力の前では無力であった。
ウルシア（？）「ドラゴンの鱗は硬いと聞いていたがまさかこんなにも硬かったとは…」

バリアリーフ（？）「このままではジリ貧ですわ」

二人は焦りはじめた。ドラゴンの飛行速度と二人の移動速度はさほど違いは無いがドラゴンは空中にいる。必然的に空中にいるドラゴンのほうが有利というわけになる。隙を見て逃げようにも決定打になる攻撃も隙になるような手段も無い。しかも隙があって逃げたとしても空中にいるドラゴンのほうが速い。結論…詰んでいた。

しかし…

アタックライド〈ギガント〉

ドガァァァン!!

ドラゴンが爆発した。正確には何か飛来した物がドラゴンに当たり爆発し地上に墜落した。その正体はミサイル。この時代…いやこの世界ではありえない現代兵器だ。その現代兵器を放ったのは勿論この世界の主人公（白鷺姫）だ。

姫「危なかった…」

追いついたときにはドラゴンは二人と対峙していた。一人は一見、人族に見える男。しかし気鱗を使っているので竜族だろう。そしてもう一人…原作キャラのバリア……バリアリーフ！バリアリーフだ。バリアリーフは原作では重要キャラではあるが世界

の運命が左右するほどのキャラではない。しかしバタフライ効果が……すまない、正直になろう。俺はバリアリーフの事は好ましく思っている。Ｔｉｎｙ　Ｄｕｎｇｅｏｎで何故ヒロインに入っていなかったのか…サブでもいいから入れてほしかった…。まぁそんなことはともかく原作キャラともう一人助けられたからよしとする。

バリアリーフ（？）「あなたは…？」

姫「あ～そんなことよりアレをなんとかしないと」

俺がそういって地上にいるドラゴンと対峙する。さすがに４連装のミサイル（ガン）ランチャー（ト）と偽・螺旋剣（カラドボルグⅡ）が効いているのか結構ふらついていた。

姫「今のうちに殺しておくか」

さっさと殺してさっさと逃げよう！そうしよう！

バリアリーフ（？）「あの…」

俺はバリアリーフ（？）の言葉を無視して一枚のカードをディケイドドライバーに読み込ませる。あいにくこの気を逃したらいつ倒せるのか分からなかったからだ。

アタックライド〈ブラスト〉

不規則の弾丸がドラゴンの足元に集中的に攻撃されドラゴンは態勢を崩す。

姫「二人とも手伝え！全力攻撃だ！」

俺の言葉に二人は一瞬呆けたが言葉の意味を理解し二人は気鱗を発動する。

姫「鶴翼、欠落ヲ不ラズ、心技、泰山ニ至リ、心技　黄河ヲ渡ル」

俺は二対の干将・莫耶《かんしょう・ばくや》を投影し投げる。

姫「唯名　別天ニ納メ、両雄、共ニ命ヲ別ツ……！」

更に一対の干将・莫耶《かんしょう・ばくや》を投影しドラゴンに向かって走り出す。

竜族の二人も俺に続き走り出す。先に投げた二対の干将・莫耶《かんしょう・ばくや》がドラゴンに向かっていく。俺はエミヤが使っていた技を繰り出す。

姫「鶴翼三連!!」

先に投げた二対の干将・莫耶《かんしょう・ばくや》と俺が持っている干将・莫耶で三対の同時攻撃＋竜族の全力の気鱗の攻撃をドラゴンはモロにくらった。

姫「当たり所がよかったな…」

俺は手に持っている傷がついていない干将・莫耶を見てそう呟く。偽・螺旋剣でも鱗を剥がす程度で終わったのに干将・莫耶には傷がつかなかったのは鱗が剥がれている所…つまり偽・螺旋剣で剥がした所にうまく当たったのでドラゴンに大ダメージを与えられたのだ。

グオオオオ…

流石のドラゴンもアレだけの攻撃をくらって静かに倒れる。

ウルシア「やったか!?」

姫「フラグを立てるなよ…」
1分が経過したが動かない…どうやら本当に死んだらしい。俺たちは肩の力を抜き地面に座り込む。
ウルシア「いや～助かった…礼を言う。俺の名前はウルシアだ」
バリアリーフ「本当に助かりましたわ…今回ばかりは死ぬかと思いました。私の名前はバリアリーフと言います」
姫「礼は受け取っておく…じゃあ俺はも行く」
俺は立ち上がり歩き始める。
ウルシア「まぁ待ってくれ。改めて礼をしたい。我、城に招待したいのだが…」
姫「用事がある。じゃあな」
これ以上原作キャラに関わる事をすればどんなバタフライ効果があるか分からない。はやく別れてさっさと元の時間軸に返れる方法を探さないと…
バリアリーフ「待ってください。せめて名前だけでも」
…これを言えば開放されるが…原作突入したらどうなるか……しかたない
姫「俺の名前はっ!?」
俺は体が硬直した。そんな俺を見て竜族の二人も俺が見ている方向に目を向ける。そして硬直する。硬直した原因、それは二体目のドラゴンがこっちに向かってきている

事だった。しかもさっきのドラゴンよりも一回り大きい。親か？って言うことはこいつまだ子供かよ…自分の子供を殺されたらそりゃあ怒るよな。

俺は二人を置いてドラゴンに向かっていく事を想定する。俺一人ならワンチャン、インビジブルで逃げられるから引きつけて置いて逃げられるが二人の体力は殆ど無い。ドラゴンとの戦闘そして魔族との戦争…体力がなくなるのは必然だった。しかし総合的に見るなら助かる可能性は高いだろうが不確定要素が二つある。もし他種族に見つかったら？もしドラゴンが俺ではなくあの二人に攻撃したら？どちらとも低い可能性だが決してゼロに近い確率ではない。

姫「はぁ…」

俺はこういう性格だ。残酷になりきれない俺が嫌になる。いやこれが本来の白鷺姫としての生き方なのかもしれない。

姫「ああ…最悪だ。今日という日を、俺はきっと後悔する」

アタックライド〈サイドバッシャー〉

俺はそう呟きながらサイドバッシャーを出す。サイドバッシャーとは仮面ライダーの中では珍しいサイドカー付きのバイクだ。

姫「さぁ乗れ…」

俺はバイクに跨り二人が乗るのを待つ……が一向に乗らない。

姫「乗れよ！」
俺はサイドカーの方を指で指し二人は理解したのかサイドカーに乗る。俺は二人が乗ったのを確認しサイドバッシャーを運転した。サイドバッシャーのバイクフォームでの最高速度は時速３６０ｋｍ。そしてこの先は戦場をしていなかった場所に出るので道が安定している。つまり余裕で引き離すことが可能であった。
ウルシア「こんな乗り物みたことない…」
バリアリーフ「はい…とても速い乗り物ですわ」
俺は二人の会話に割って入った。
姫「お前らの城って何処にあるんだ？」
ウルシア「ん？この先をずっとまっすぐに行けばよい！」
姫「はぁ…わかった」
俺は更に加速しドラゴンを完全に引き離した。

竜族～彼女

名前は知らないが竜族の城に着いた。見た感じファンタジー世界にあるザ・お城って感じのお城だ。送り届けたし俺もさっさと別行動をしようと思ったがバリアリーフに止められた。さすが竜族、力に関してはお手上げ状態だ。渋々城の中に入った俺はどうやって城から抜け出そうとかはもう考えてなかった。もう完全に諦めムードだった。強引に抜け出せばバリアリーフに出くわして戦闘なんてして重傷、死なせてしまうことなんてあればバタフライ効果でどんな影響があるか分からない。またあの人がこの城にいるかもしれない…かといってこそこそ抜け出してしまっては間者と間違われる可能性がある。ならば開放してくれるのをまって堂々とこの城から出よう。俺はそんなこと考えていたのだが……気付けば1週間たっていた。

姫「そろそろ村に帰りたいのだが…」

バリアリーフ「ならその村までお送りいたしますわ」

姫「いやいやそんなことまでしてもらわなくても…」

バリアリーフ「竜王様を助けていただいた恩人に送り迎えをしないとなれば竜族の沽券に関わりますわ」

姫「じゃ、じゃあその村の近くまででもいいので…」

バリアリーフ「…」ニコッ

俺は部屋に戻った。

だ、駄目だ…勝てない。そもそも俺が住んでいる村は戦後に出来た村なので当然今は存在していない。付近の村も戦後に出来た村なのでこれもなし。後俺が知っている村は人族の有名な街ぐらいで、その街は人族の最重要拠点でもあった場所…つまり今は人族の最重要拠点である場所だ。しかも軍の最重要拠点だ。他種族が近寄れる場所ではない。俺は諦めて部屋に戻った。

正直言ってもうお手上げ状態だった。なんだか竜族の人（城内にいる人）全員が俺を何とかして引きとめようとしているような感じがする。竜王や竜妃（竜王を助けた事によって知り合った）、バリアリーフがいない時に城から出ようとしたらメイドたちに取り囲まれてそのまま部屋に戻された。これ絶対に城から出させないようにしているって俺は確信は持てないけど自信もって言える！

……正直言ってこのまま竜族にお世話になっておこうかなっていう気持ちはある。ここにいれば衣食住は勿論、娯楽もそれなりにあり会話が出来る人たちもいる。けどこのままもとの時代に帰れなかったら？そんな気持ちが心の中で渦巻いていた。時間が経てば帰れるって言う仮説もあるがそれがいつなのかも本当に時間が経てば帰れるっ

て言う保障も無い。

しかたない…強引にでも一人で帰ってやる！というわけで俺は今王室にきてウルシア竜王とリルル竜妃、バリアリーフに見守られながら対峙した。

姫「…ということでウルシア、俺もう帰るわ。護衛とか見送りはいらん」

ウルシア「なにがということでなのかは知らないが、これでは竜族としての沽券が…」

姫「なんでそんなにも俺をここに引き止めたがる？」

ウルシアは困った表情を見せ竜妃のリルルはオロオロしている。バリアリーフも少しあせっている感じだ。

ウルシア「…正直に言ってお前を人族に返したくないのだ」

やっぱり引き止めていたのか…

姫「理由は？」

リルル「あなたには竜族の一員になってもらいたいのよ」

竜族の一員？それってつまり…

姫「つまり俺が竜族の誰かと結婚して竜族になってほしいと？」

バリアリーフ「簡単に言えばそのとおりですわ」

…予想の斜め上をいった。大方人族に返してもし敵対したら強力な相手になるということでこの城に閉じ込めておこうと思っていたが…いやそれも含めての勧誘か？

ウルシア「このまま人族に返してしまってはお前が竜族の脅威になるというのも否定はしない」
やはりそうだったか…まぁ予想通りだが。
姫「質問、もし俺が竜族になるといったら誰と結婚させる気だ？」
ウルシア「バリアリーフだ」
姫「バリアリーフ？」
俺はバリアリーフを見る。……少し頬が赤くなっている。
リルル「少なからずバリアリーフはあなたのことを想っているからね」
姫「何？」
俺は再度バリアリーフを見る。めっちゃ赤くなっていた。
リルル「知らなかったの？バリアリーフはあなたの戦う姿を見て一目惚れしたみたいよ」
バリアリーフ「リルル様！もうこれ以上は…」
知らなかった…確かに俺と喋っているときは頬が赤くなっているときがあったがまさか俺に惚れているなんて思いもしなかった。
姫「…少し考えさせてくれ」
ウルシア「バリアリーフでは不満か？」

バリアリーフ「えっ…」
バリアリーフはまるで捨てられた小猫みたいな目で俺を見てくる。
姫「そうではない…俺も人族だ。そう簡単に人族をやめて竜族になるなんて軽々しく言えない」
ウルシア「まぁそのとおりだな。うむ…期限はない。いつまでも俺たちは待っている」
姫「…すまない」
俺は部屋に戻った。

部屋に戻った俺は当然、悩みぬいている。俺とバリアリーフは結婚したら当然バタフライ効果が待ったなしだ。バリアリーフはメインヒロインでもサブヒロインでもない。しかし主要キャラだ。そんな人と付き合ったら何かしらのバタフライ効果がある。それがいい方向に行くのか悪い方向に行くのかは不明だが……しかしいいのかそれで？一人の女性の気持ちを踏みにじってあくまで未来のための投資をするのか？ならバリアリーフと付き合い未来がどうなるか分からない結末にするのか？最悪、悲劇でこの物語が終了してしまうかもしれない。バリアリーフと付き合いそんな不確定要素だらけの未来にするのか？

俺は未来を選ぶのか女性を選ぶか……どっちが正しくてどっちが間違っているのか俺にはわからなかった。

トントン（ドアノック音）

??「姫…少しいいですか？」

姫「ん…ああ大丈夫だ」

??「失礼します」

ガチャ（ドア開閉音）

扉が開き一人の女性が入ってきた。……バリアリーフだ。

姫「バリアリーフ…」

バリアリーフ「すみません。夜遅くに…」

バリアリーフは申し訳なさそうに顔を俯かせている。いや…顔が若干赤い。恥ずかしがっているのか…無理も無い。不本意とはいえ自分の好きな人を暴露されたのだ。

姫「いや…別に大丈夫だが、なんのようだ？」

バリアリーフ「実は改めてお話をしようと思いまして」

姫「…」

バリアリーフ「あの時におっしゃっていた事…私が姫が好きと言うのは本当です。この事実をどうしても私の口から伝えたくて…」

姫「あぁ…けど俺はいずれここからいなくなるかもしれない」
バリアリーフ「え…」
声がかすれそうなほど小さい声でバリアリーフは驚いた。
姫「この竜族の領地からではない。この時代から…だ」
バリアリーフは混乱していた。俺が突然、突拍子もないことを言ったからだろう。顔が困惑の表情になっていた。
姫「仮に俺とバリアリーフが結婚したとしてもそんな悲しい思いをさせてしまう」
バリアリーフ「…何故この時代から消えるのかは教えてはくれないのでしょうね。だけどこれだけは言っておきます！私はこの時代から消えても私はあなたを思い続けますよ」
姫「…！けど俺は他の女性とも結婚するかもしれない！お前の事を蔑ろにしてしまうかもしれない…俺は」
パシィィン!!
俺は一瞬何をされたのか理解できなかった。しかし頬の痛みそしてバリアリーフの体勢…俺はビンタされたのだ。そうだ…そうだよな。普通堂々と『浮気をするぞ』なんて言って怒らない女性がいるはずが無いよな。
バリアリーフ「勘違いしないでください！浮気ぐらい…男の甲斐性というものです！

それくらいで怒るなど姫にも…相手の方にもございません！それに私は蔑ろにされないように姫に着いていく所存です!!」

姫「!?」

バリアリーフ「私はあなたが何処に行こうと誰と付き合おうと私を一人の女性として一人の嫁として扱ってくだされば私はそれだけで幸せなのです！」

姫「……」

絶句とはまさにこの事なのだろう。バリアリーフから話された言葉の数々が俺の心に突き刺さる。そしてそれはまるで毒のように体中に溶け込み体を温めていく。俺は…白鷺姫として生まれて初めて心の底から涙を流しそうになった。

バリアリーフが俺を抱いて背中をポンポンと叩いてくれる。その行為に俺は更に泣きそうになっていく。

バリアリーフ「ですから私と……結婚してくれませんか？」

姫「……はい」

思えば俺は白鷺姫としての生に拘り続けていたのかも知れない。白鷺姫がこうしたんだから俺もこうしなければならない。そうじゃなければ未来が悲劇なものになってしまう。俺はそう考え続けていた。しかしバリアリーフと話していて分かった事があった。それは俺が白鷺姫ではなくシラサギヒメだったという事。俺がシラサギヒメ

になっていた時点でもう白鷺姫ではなくなったという事だ。
今の俺はもう迷ったりしない。バタフライ効果なんてもう気にしない。俺のやりたいようにやる！それがどんな悲劇になろうと俺はその悲劇を喜劇に変えてみせる！俺はようやく白鷺姫になったような感じがした。
その夜…一人の男女が結ばれた

次の朝…俺は廊下を歩いていると前からウルシアが歩いてきた。
姫「あぁ…ウルシアおはよう。俺バリアリーフと結婚するわ」
ウルシア「おはよう……えっ!?」
姫「それじゃあ…」
俺は結婚予定報告だけ済ませてウルシアと別れる……
ウルシア「ちょちょ……まったまった!!」
姫「なんだよ?」
ウルシア「今！大事な事をさらりと言わなかった!?」
ウルシアは吃驚した様子で俺に問い詰めてきた。
姫「……おはようか?」
ウルシア「ちがう！それは唯の朝の挨拶だ！」

姫「あぁ…か？」
ウルシア「言葉になってない！というか何でそれと思った？」
姫「…ウルシアお前…」
ウルシア「なんだよ…」
姫「何をそんなに興奮しているんだ？」
ブチッ!!
ウルシア「とても大事な事をさらりと言ってそれを聞き返そうにも姫が言わないから興奮しているんだろう!!」
俺の肩を掴んで前後に揺らす。気鱗のちからが若干働いてとても凄い揺らしかただ。酔いそう……そんなこんながあった次の日であった。

メイド～戦争

俺とバリアリーフの結婚が確定してからずっと城の中にいる。本来、元の時代に返れる方法を探さなくてはいけないがもう俺は俺のやりたいようにやると決めたのでまったく探す気がない。そして結婚式だがまずはお互いをもっとよく知り合ってから結婚と言う形で収まった。まぁいきなり結婚は早すぎだからなぁ。……まぁそれはともかく今俺はウルシアに呼ばれ王室に来ていた。

ウルシア「お前に専属メイドをつけようと思う」

姫「専属メイド？なんでまた？」

ウルシア「バリアリーフの夫（予定）になるんだ。バリアリーフはそれなりの高い地位にいるんだからその夫に専属メイドをつけるなんて当然だろ？」

姫「当然なのか？」

高い地位にいるから専属メイドをつけるっていう発想はわかる。けど必ずしも専属メイドをつけなきゃいけないのかどうかは些か疑問である。

ウルシア「当然に決まっているだろう！高い地位のものにはそれなりの扱いをしなければ下の者と上の者の差というものをある程度は示さなければならない」

姫「そういうものか」
ウルシア「そういうものだ」
政治とかにはあんまり詳しくは無いがそういったことをしなければならないのだろう。
ウルシア「入れ」
??「失礼します」
ガチャ（ドアの開閉音）
ドアが開き中に人が入ってきた。薄紫で後ろ髪を結んでいるポニーテイル。服装はメイド服だがスカート短めとかではなくちゃんとした生粋のメイド服だ。腰あたりに大きいリボンがあるが別にこれくらいは普通であると思う。……何で気付かなかった!!メイドといえばあの人（ネタの塊）しか居ない！
ウルシア「紹介しよう。彼女がお前の専属メイドになる…オペラ＝ハウスだ」
オペラ「ご紹介に預かりました。オペラ＝ハウスと申します。以後お見知りおきを」
あれ？
オペラ「炊事洗濯、その他諸々ができます。大抵の事は出来ますので何なりとお申し付けください」
アレ？

オペラ「また戦闘の技術も御座います。万が一にも貴方様を傷つける事が無いよう命を懸けて貴方様をお守りいたします」

ａｒｅ？

オペラ「あの…何かご不満がありましたでしょうか？」

不満があったように見えたのか何も言わない俺に声をかけてきた。いや何も言わなかったから不満に見えたのかもしれない。いやそれよりも……え、何アレ？俺の知っているオペラ＝ハウスではない！口を開けばネタが出てくるのが俺の知っているオペラ＝ハウスだ。けど目の前に居るのは容姿は俺が知っているオペラ＝ハウスだ。けど何アレ？まるで本当に出来るメイドみたいになっているではないか！いや…オペラ＝ハウスは出来るメイドだけど……

ウルシア「なんだ？オペラが気に入らなかったのか？容姿か？年齢か？」

いや容姿でも年齢でも…って年齢って言っちゃまずいでしょ！

オペラ「…」

何も言わないんかい！……って俺も何か言わないと！

姫「い、いやあまりにもうよく出来たメイドだからすこし驚いていた」

オペラ「光栄で御座います」

いや本当に誰だよお前！いや…これは読者のみんなにはよかった事なのかもしれな

い（メタイ）
ウルシア「そうだったのか。まぁオペラはとても有能だ。何かあればオペラを頼るがいい。……オペラとも結婚してもいいがバリアリーフとちゃんと話してからじゃないと怒るぞアレ…」
オペラ「ご冗談を…」
姫「何でオペラ…さんも結婚する話になっているんですか?」
ウルシア「見惚れていたのだろう?」
姫「驚いていただけだ」
ウルシア「まぁそういうことにしておいてやるよ」
姫「事実なんだが…」
いや本当に驚いている。あの性格に!

そして一ヶ月が経った。オペラさんは相変わらずあの性格のままだ。正直に言ってやり難い。正にできるメイド!っていうのを体現したかのような人だ。不快な事に思うような言動はしないし気遣いも出来る。たまに心を読んでいるんじゃあないかって言うぐらいに気遣いをしてくるときもあるくらいだ。今オペラさんは俺たちの図書室

の掃除をしている所だ。
姫「なぁバリアリーフ」
バリアリーフ「なんでしょう？」
姫「オペラさんっていつもあんなふうなのか？」
バリアリーフ「いつもあんなふうですよ」
姫「…そうか」
バリアリーフ「…」
姫「なんか冷たくね？」
バリアリーフ「私はいつもこんな感じです」
バリアリーフはそっぽを向いてこちら側を見ようとしない。
姫「…妬いているだけか」
バリアリーフ「なぁ！や、妬いてません！断じて妬いて…」
姫「はいはい。妬いてない妬いてない」
バリアリーフ「／／／…ええそうです！妬いてますとも！姫からまさか浮気発言をこんな早くから聞かされるとは思ってもいませんでしたから！」
姫「浮気じゃない！気になるだけだ」
バリアリーフ「それを世間一般では浮気と呼ぶのですよ!!」

姫「そうじゃない。……俺はこの城に来て色んなメイドを見てきたけど、どのメイドも笑顔がってみんなと楽しそうに喋っていたりしているんだよ」
バリアリーフ「それがどうかしましたの？」
姫「けどオペラさんだけは誰かと私用の事で喋っていたり笑顔を見せなかったりと色々と気になってさ」
バリアリーフ「…確かにオペラは誰かと世間話をしていたりましてや笑顔を見た事もありませんでしたわ」
姫「気遣いが出来て家事全般どころか色んな技術を持っている。正にメイドの鏡…いやそれ以上だ。だけどオペラさんは自分のことを必要以上に話さない。俺はそこが気になっているんだよ」
バリアリーフ「確かに気になりますね」
姫「俺たちの専属メイドっていうのもあるしちゃんと今度この事について話し合おう」
バリアリーフ「そうですわね。それなら明日にでも…」
??「失礼します！」
バリアリーフ「何事ですか!?」
メイドがノックもせずに入ってきた。つまり緊急の連絡があるって言う事だ。

メイドA「魔族軍が西より進行中！」
バリアリーフ、姫「!?」
メイドA「直ちに戦争の準備に取り掛かってほしいとの事です！」
バリアリーフ「わかりましたわ」
メイドは部屋を出た。
バリアリーフ「この話はまた今度に。私は戦争の準備に向かいますわ」
姫「いやまて」
バリアリーフ「?」
姫「俺も行こう」
バリアリーフ「ですがまだあなたは正式に竜族には」
姫「なる予定だからいいだろう。それに恋人を戦争に向かわせて安全な所にいるって言うのは性に合わないんでね」
バリアリーフ「姫…わかりましたわ」
俺たちは戦争に行くための準備をはじめた。
コンコン（ドアノック音）
姫「入れ」
??「失礼します」

オペラが部屋に入ってきた。どうやら図書室の掃除が終わったようだ。
オペラ「図書室の掃除が終わりました。…あの狩りにでも行くのでしょうか？」
バリアリーフ「戦争に行って来ますわ」
オペラ「!?」
姫「オペラさんは留守番をお願いしてもいいですか？」
オペラ「いえ、私も行きます。ご主人様をお守りするのが私の使命ですから」
姫「そうか…守るのは勝手だがこれだけは命じる死ぬな…わかったな？」
オペラ「…はい」
俺たちは部屋を後にした。